

第459空輸中隊:救命搬送チーム *The 459th Airlift Squadron: a life-saving evacuation team*

April 9, 2020

By Airman 1st Class Briana E. Bolfig
374th Airlift Wing Public Affairs

小型の白い機体が雲の中に消えていくにつれ、C-130J輸送機とは比にならないほど静かなエンジン音がフライトラインの上空に響く。その機体は、大きい輸送機とは異なる器材を搭載している。あまり知られていない横田基地所属のこの機体は、専門医療を必要とする患者だけでなく、より良い明日への希望を運んでいる。

必要な患者に航空医療搬送を行う横田基地第459空輸中所属C-12Jヒューロンのパイロットにとって、この「希望を運ぶ」仕事こそがやりがいだ。

「基地によって、提供できる医療は異なる。所属基地で必要な医療が受けられない場合、対応できる基地へ行かなくてはならない。別の医療施設へ搬送する間も患者の状態を観察し、必要な処置をする必要があるため、民間機の使用は患者にとって良い選択ではないことがある。そういう時こそ我々の出番となる」と第459空輸中隊運用副部長クリスファー・タルク少佐は述べた。

2017年9月以降、第459空輸中隊は(グアムを含む)東アジアに展開する米軍人とその家族のために、主要な空飛ぶ救急車としての任務も行っている。パイロットはできるだけ早く患者を適切な医療に搬送し、飛行中には医療チームが患者の状態をモニターする。

「医療チームが客室で任務を行う姿に気持ちが高ぶる。必要なことを成し遂げている自信が得られ、患者が安全な状態にいることを実感できる」と第459空輸中隊副官兼C-12Jパイロットのダニエル・カー中尉は語った。

「ほとんどの患者は、行動的集中治療(BICU)を必要としているので、アメリカの医療機関に移すために沖縄の嘉手納基地へ迅速に搬送する」

搬送チームは、頻繁にそうした特定の臨床に対応しているが、時にパイロットは特別なケースに直面することもある。

「最近では、白血病の幼児を搬送する任務があった。その幼児は免疫不全だったため、患者の安全のために我々はマスクを着用した」とカー中尉は述べた。

こうした安全(感染予防)対策は一般的だが、この任務を成し遂げるには独特な難しさがあった。子供が白血病と闘う姿を目にするのは、誰にとっても心痛な思いだろうとタルク少佐は語った。

タルク少佐たち搭乗員は、闘病でやつれた幼い無垢な顔を目の当たりにした。

その子を可能な限り迅速に搬送することが唯一の使命だったが、横田のC-12Jのパイロットは、その幼い子の目を輝かせるために、あることが頭に浮かんだ。

「その子は内気で、また、病気により疲労困憊だったので、母親と飛行計画について率直に話をし、また患者の子に我が部隊のワッペンをプレゼントした。その子にとって軍用機に乗ることは特別な体験だと思ったので、可能な限り、思い出に残る体験にしてあげたかった。そのために、安心してもらえるように尽くした。ワッペンのようなちょっとしたものをあげることで、その子を喜ばせることができ、その子の明るい表情を見れた時はとてもいい気分だった」とカー中尉は振り返る。

幼児を専門治療に搬送する任務はとてもやりがいがあって、とタルク少佐は振り返る。これからも続く患者の病との闘いは、飛行チームと第459空輸中隊全体によって誠心誠意支え続けられる。

「我々が搬送した患者の一人は、破裂性腫瘍を患っていた。そのため、機体の高度をかなり低く維持する必要がある。パイロットは、通常より低い高度で飛行する間、航空医療技師たちは患者に酸素を一定に確保し続けた」とタルク少佐は話した。



「我々には、輸送中に医療酸素を供給できる能力がある。それは、通常の旅客機で供給できる酸素とは少し異なる。その時の腫瘍のケースでは、実際に異なる濃度の酸素が必要だった」

第459空輸中隊のパイロットにとって、同僚の軍人やその家族の救命に関わる使命を果たすことは、なにものにも代えがたい充実感がある。

「航空医療搬送では、一つの大きな絵(ミッション)の一翼を担っていると実感できる充足感がある。患者が回復するためにチームの一員として、患者が必要とする助け、受けるべく助けを得る一連の努力の一翼を担ったことを実感できることにやりがいがある」とカー中尉は語った。